

---

---

# 自立活動実践例集 No.3

---

---

2026年3月

はじめに

**I章 年次大会講演** ..... P2

1. 本吉大介（熊本大学）：生成 AI を利用して個別の指導計画を作成する際のコツと留意点
2. 討論会記録：特別支援教育と生成 AI 「おげんまる」の可能性

**II章 定例研究会資料** ..... P14

1. 石倉健二（兵庫教育大学）：「流れ図」を使えるようになろう！
2. 瀬戸山悠（神戸親和大学）：個別の指導計画作成における生成 AI の活用の実践と課題
3. 橋本正巳（兵庫大学）：学習支援の基礎・基本 —背景理解に基づく実践—

**III章 実践報告** ..... P38

1. オンライン授業検討会による通級指導 1 年目の教師の変化  
（兵庫県立宝塚西高等学校 白井俊介）
2. 笑顔の根っこを育てる ～肢体不自由特別支援教育の実践報告～  
（芦屋市教育委員会 田中秀平）
3. 本校の通級指導教室での実践について（川西市立多田小学校 森吉史）

**IV章 わたしのひと工夫（自立活動の教材紹介）** ..... P58

- 事例 1【身体の動き】【環境の把握】【コミュニケーション】小学部 6 年  
事例 2【身体の動き】中学部 2 年  
事例 3【心理的な安定】【健康の保持】高等部 1 年

**研究会紹介・編集後記** ..... P61

---

---

ひょうご自立活動研究会編

## 一人一人の可能性を最大限にひらく自立活動の創造に向けて

ひょうご自立活動研究会会長 岩崎正彦  
(兵庫県立姫路しらさぎ特別支援学校校長)

ひょうご自立活動研究会は、2019年3月に、自立活動の充実を目指し、関係する学校教職員等が研鑽を積むことを目的として発足しました。発足以来、県内の多様な教育現場の教職員が校種の枠を越えて学び合い、子ども一人一人の姿に根ざした自立活動の在り方を探究してきました。

本年度、兵庫の各特別支援学校では、「個別最適な学び」「社会につながる教育」「地域とともにある学校」等をキーワードに、実践研究が一段と充実していることと思います。これらの三つの視点は、特別支援教育における「自立活動の指導」を質的に高めるための重要な柱です。

まず「個別最適な学び」についてです。子どもの状態像や学びの特性を丁寧に捉え、個別の教育支援計画・個別の指導計画を継続的に活用し、計画と実践を往還させることが、自立活動の充実に不可欠です。計画は作成すること自体を目的とするものではなく、日々の指導を改善し、支援の方向性を明確にするための大切なツールです。本研究会では、計画の作成に役立つ「流れ図」の活用や、学習に困難さを抱える子どもの理解と関わりの基礎基本に関わる研修を重ねており、現場の実践力を高める取り組みを続けています。

次に「社会につながる教育」です。卒業後の生活・就労・地域との関わりを見据え、学校での学びが子どもの人生へと確実につながるよう支援することが求められています。昨年度の年次大会では、生成AIを活用して個別の指導計画を作成する際のコツと留意点をテーマに講演と討議を実施し、教員の専門性とテクノロジーの適切な活用について新たな気づきが得られました。

さらに、「地域とともにある学校」の視点です。インクルーシブ教育システムの構築を進めるためには、特別支援学校だけでなく、小学校・中学校・高等学校が連携し、地域の中で子どもを継続的に支える仕組みを整えていくこと、すなわち「インクルーシブな学校運営」が求められています。本研究会が継続して開催している定例研究会や「しゃべり場」は、校種や地域の枠を越えて実践や課題を共有し、「互いがつながり理解が広がる場」として発展してきました。

今回発行する「実践例集」には、県内の先生方が積み重ねてこられた自立活動の工夫や改善のプロセスが丁寧にまとめられています。どの実践にも、子どもの小さな変化に寄り添い、試行錯誤を重ねながら歩んできた現場の力がにじんでいます。読者の皆様には、本実践例集を日頃の指導や校内研修、若手教員の育成など、さまざまな場面で有効に活用していただければ幸いです。

私たちがめざすのは、一人一人の可能性を最大限にひらく自立活動の創造です。これからも、ひょうご自立活動研究会が学び合い・つながり合う共同体として、子どもたちの自立と豊かな成長を支える研究を推進してまいります。引き続き、皆様の温かいご協力とご参画を心よりお願い申し上げます。

生成 AI を利用して個別の指導計画を作成する際のコツと留意点

熊本大学 本吉大介

\* 本原稿は 2025 年 3 月 9 日に実施された第 7 回年次大会での講演を文章化し、本吉先生の同意のもとで一部の内容を省略して掲載しています。

1. 結論

**コツ：子どもの実態把握ができていて、AI に詳しく伝えられること**

→ 特別支援教育の専門知識は必要（実態把握・指導方法・評価方法）

→ できるだけ具体的に AI に伝えること（言語化・プロンプト）

AI に有効な指導計画を作成させるには、児童生徒の実態を的確に把握し、具体的な情報として言語化して伝えることが重要である。特別支援教育に関する専門知識（自立活動、評価方法、指導技法など）は、AI 活用において不可欠である。出力された情報の価値を判断し、取捨選択する力が求められる。

**留意点：AI に丸投げして、コピペして書類だけ作っても良い授業にはならない**

→ 生成された情報を精査すること（可能であれば複数名で）

→ 節約した時間とエネルギーは、子どもに伝えるための授業準備に使う

AI が生成した書類や資料は、あくまで「提案」であり、それだけで良い授業にはなりえない。教師自身が精査し、教育的判断を加えることが不可欠である。AI によって節約された時間と労力は、児童生徒への指導準備や授業改善に充てるべきである。複数名での情報精査や協働によって、より質の高い教育実践が可能となる。

2. 研究プロジェクト紹介

本プロジェクトは、科学研究費の助成を受けて実施されており、『特別支援教育における授業・教材研究を支援する情報プラットフォームの開発と実装』を目的としている。

講師自身は心理の専門家（公認心理師・臨床心理士）として、学校現場を訪問する中で、教師が抱える困難や課題を実感してきた。特に、教師の働き方や精神的負担に関しては、講師の家族が教師であるという原体験からも強い問題意識をもっている。熱心に働く父親が体調を崩した経験や、大学の卒業生が現場で苦しんでいる姿を見て、「何とかしたい」という思いが研究の原動力となっている。

また、特別支援教育における自立活動やアセスメントの高度な専門性は、現場に導入する際に手続きが複雑で、教師間の専門性の差や経験の差が課題となっている。こうしたギャップを埋めるために、当初は「情報が集まるデータベースを作りたい」という構想からスタートした。

プロジェクトを進める中で、共同研究者である財満昭彦先生の存在が大きく、財満先生が生成 AI の可能性を見出したことで、情報プラットフォームの構想が大きく進化した。講師自身は「止めなかったことが貢献」と語るほど、財満先生の技術的な洞察がプロジェクトに新たな方向性をもたらした。

研修：「流れ図」を使えるようになろう！

兵庫教育大学 石倉健二

2024年11月23日 第2回定例研究会

第2回定例研究会は、特別支援学校学習指導要領自立活動編に示されている、いわゆる「流れ図」（本文末に提示）に沿った個別の指導計画の作成ができるようになるとともに、各学校等で研修を行う際の実施方法やポイントを理解することを目的に実施した。その研修の手順等を以下に解説する。

1. はじめに

第2回定例研究会は、研究会の役員・運営委員に参加を限定して、「流れ図」に沿った個別の指導計画の作成についての演習を行った。実施方法は以下の通りであった。

(1) 事前課題：定例研究会に先立って、自立活動と個別の指導計画についての解説資料と架空の事例“あきさん”の実態についての資料を参加者に配布した。参加者は解説資料により、自立活動と個別の指導計画、「流れ図」について確認をして、“あきさん”の実態について自立活動の6区分について情報整理を行った上で参加した。

(2) 当日スケジュール：以下のスケジュールで実施した。

- 09:20～09:40 I オリエンテーションとグループ作り
- 09:40～11:10 II 実態把握（「流れ図」①②）
- 11:20～12:50 III 指導すべき課題の整理（「流れ図」③④）
- 12:50～13:40 昼休み
- 13:40～14:40 IV 指導目標（ねらい）の設定と項目の選定（「流れ図」⑤⑥）
- 14:50～16:20 V 項目同士の関連付けと仮の指導内容の設定（「流れ図」⑦⑧）
- 16:30～18:00 VI 兵庫県等の「個別の指導計画」様式への整理と報告

(3) 方法：参加者4名とファシリテーター1名の5名が1グループとなり、3グループで実施した。

2. 架空の事例“あきさん”の情報（「流れ図」①） ➡本文末に提示

3. 「流れ図」②についてのグループワークの手順と内容

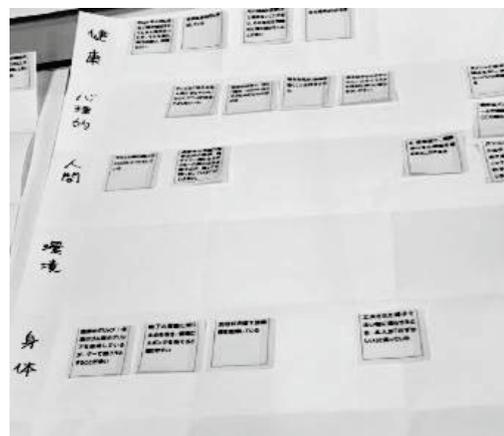
(1) 6区分27項目を活用した整理（「流れ図」②-1）

◆事前課題で作成してきた整理表を見ながら、用意されている情報カードを画用紙に配列した。<右図>

◆その際、まずは個人で作業してその結果をグループ内で見せ合い、協議しながら再整理した。

(2) 学習上又は生活上の困難や、これまでの学習状況の視点から整理（「流れ図」②-2）

◆学習上又は生活上の困難（できないこと）、できること、もう少しでできそうなこと、以前にはできなかったができるようになったこと、支援があればできること、などを記入する。



本校の通級指導教室での実践について

川西市立多田小学校 森 吉史

2025年12月20日 第2回定例研究会

1. はじめに

川西市で通級指導教室の担当をしている。本日は、以下3点の事例について発表する。

- ・音韻操作に弱さを持つ児童の症例
- ・書字が苦手な児童の症例
- ・漢字を覚えるのが苦手な児童の症例

2. 音韻操作に弱さを持つ児童の症例 (小学校中学年 男子)

(1) 児童の実態

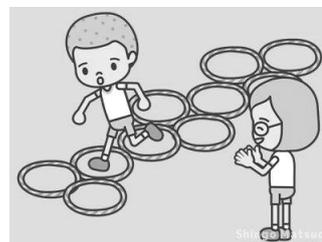
読み書きが苦手 (本は読めない、字を書くが忘れていた字もある、書けるが特殊音節のところは抜けていて何を書いているか読めない) で、学習意欲が持てず教室内で怠惰な生活をしている。兄弟が多く、家庭学習が困難な環境にある。WISC-IVの結果を踏まえ、特別支援学級への在籍変更の移行までの期間、通級を利用することになった。検査結果から、言語理解は82であり、本児の能力の中では高いが、ワーキングメモリは57であるため、その差は25と大きな差がみられた。差が大きいということは、生きづらさを持っていることを意味している。読み書きが学習の根本を担っていることから音韻操作、特に特殊音節の習得をめざすことにした。

(2) 具体的指導方法

① 「けんけんぱ」からだを使った学習 (毎時間)

特殊音節を扱うにしても、どの音節で切るのがわからないと書けない。「音節分解」の段階がまず必要となる。

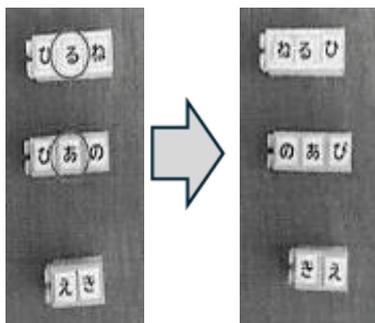
本児は、からだのバランス感覚やリズム感も悪く、動作と掛け声がずれることもしばしばあった。また、片足立ちやピタッと体を止めることが苦手であった。



② 「ブロック」をつかった音節分解の練習

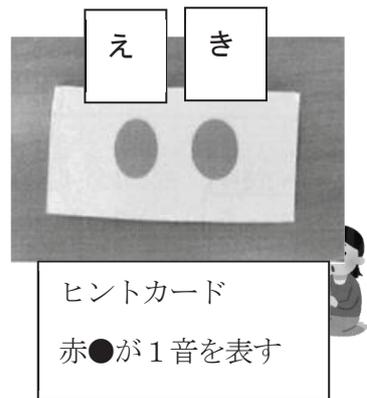
1音から3音まで単語を合体させ分解できることを目標とした。例えば「えき」なら「いくつの音からできていると思う？」と聞き、ブロックを分解して数えさせることで、次第に文字の音節分解が出来るようになってきた。同時に赤い丸で1音を表すことを併記して伝えていくようにした。

ブロックを使った  
音節分解の練習



の練習

③ 「音韻  
抽出」と  
「逆さま  
ことば」



## IV章 わたしのひと工夫（自立活動の教材紹介）

### 事例1 自立活動の区分【身体の動き】【環境の把握】【コミュニケーション】

対象児童生徒	小学部6年
児童生徒の実態	<ul style="list-style-type: none"> <li>健康状態は概ね良好だが、半年前に腸閉塞を罹患し、食事の形態や量を調整中。</li> <li>手つなぎ歩行可。疲れやすく長距離は車いすを使用。ビーズ通しなどの細かい作業は両手を使ってできる。</li> <li>発語はないが、喃語のような発声とジェスチャーやサインを合わせて、簡単なやりとりができる。</li> <li>注意転動があり、課題に取り組んでいても、周囲が気になって集中が続かない。</li> </ul>
教材のねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>サーキット運動をしながら、バランスをとって歩いたり、しゃがんだりしてからだの使い方を学ぶ。</li> <li>サーキットに弁別の課題も取り入れ、指導者とやりとりをして、回数や等を決める。</li> </ul>
手立て・工夫	<p>1. サーキットをしよう【身体の動き】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>体育館にサーキットのコースを準備する。 (平均台、トンネル、脚立、ボール入れ)</li> <li>それぞれの場所で、からだの課題を取り入れて行う。 例：○平均台＝バランス、足を交互に前方へ出す。 ○トンネル＝四つ這いで進む。トンネルの壁にぶつからないようにする。 ○脚立＝障害物を足先で感じて、足を上げて歩く。 ○ボール入れ＝目標を見て、ボールを入れる。</li> <li>※各ポイントで気を付けることを、カードで伝える。(右図)</li> </ul>   <p>2. 課題カードを選ぼう。【環境の把握】【コミュニケーション】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>サーキットを始める前に、写真カードで順番を決める。</li> <li>数字カードを使って、目標の回数を決める。</li> <li>指導者とやり取りをして行うが、児童が自分から決定できるよう支援する。</li> </ul> <p>3. 色分けの課題（ボール入れ）【環境の把握】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>サーキットの1種目として設定する。</li> <li>カゴに4色のカラーボール（赤青黄緑）を3個ずつ入れておく。</li> <li>児童は、ボールを取ってそれぞれの色のカゴに入れる。机の距離は活動量に応じて調整。</li> </ul> <p>(留意点)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>からだを動かすことが好きなので、サーキットの課題に意欲的に取り組むことができた。しかし、苦手なことはやろうとしないので、繰り返し取り組むことで、苦手意識を減らす。</li> <li>カードでのマッチング課題が得意なので、やり取りの場面で絵カードを使う。</li> <li>児童とのやりとり場面を設定し、自分の気持ちや思いを伝える練習をする。</li> <li>集中が続かないことがあるので、転倒などしないように安全に配慮して行う。</li> </ul> 
結果	<p>【身体の動き】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>サーキットのそれぞれの課題ができた時には、本人がガッツポーズをし、褒められることで、次回への意欲につながった。</li> <li>繰り返し取り組む中で、足を上げて歩くことや、ゆっくりと踏みしめて歩くことを、声かけをすると意識できるようになった。</li> </ul> <p>【環境の把握】【コミュニケーション】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>カードに合わせて「うごきの言葉」等を確認することで、言葉の理解が広がりつつある。</li> <li>色の弁別には自信を持って取り組めた。</li> <li>回数やボールの数も確認しているが、量の概念は今後も学習が必要である。</li> </ul>